

養護教諭の視点から見た学校教育の現状と課題

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

学校におけるいじめ、校内での暴力事件、学級崩壊、不登校、子どもが「切れる」等、1970年代前後から、学校の問題が注目されはじめ、21世紀を迎えてもなお、とどまることなく新聞紙上を賑わし続けている。学校をめぐる混乱を示すこれらの問題がある以上、多くの人たちが「学校は病んでいる」とみなしてもおかしくはない。

筆者が、揺れ動く教育現場に養護教諭として赴任し、保健室を拠点とした活動をつづけて、20年あまりが経過した。この間いつも考えつづけたのは、養護教諭の専門性であり、教育のなかで「大切なものは何か」ということであった。

学校教育の中心となるのは、子どもたちであるが、教員もまた一方の側の当事者である。子どもたちに対する問題解決は急がれても、教員の問題は先送りにされるのが常である。そこで本研究では、第1章において、アンケート調査を用いて教員の労働実態を分析し、さらに教員の労働条件を労働法規との関連で考察した。第2章では、保健室から見えてくる学校現場の問題点をとりあげ、教師に見られる最近の傾向について考察した。以上の議論をふまえて、第3章では、養護教諭をとおして見た学校の課題について検討した。そのさい、今日重層的な役割を担いつつある養護教諭の実践を、緩和ケアという概念でとらえ直すことを試みた。そして最後に教師の身心の健康を配慮した教育改革を求めるために、具体的な提案を提示した。

第1章 教職生活と労働実態

本章では、教職生活に関して行った意識調査にもとづき、教員の労働の実態を調べ、その問題点を分析した。その結果、教員の労働は多忙化をきわめていることが明らかになった。そのため、多くの教員は、慢性的な疲労の状態にある。しかし教員の健康管理、メンタルヘルスは不十分なままである。

第2章 保健室から見えてくる学校現場

本章では、保健室と養護教諭の法的根拠と職務について考察したうえで、保健室の日常をとりあげた。ここでは、特に保健室をとおしてみえる最近の教員たちの傾向を分析した。現在、教員たちの責任と仕事は多岐にわたり、個々の教員がそれらをすべて担うには、すでに限界に達していると言える。また職場の人間関係は希薄化し、学校のなかに心の落ち着く場所を見いだすのが困難になりつつある。その結果、子どもたちだけでなく教員も、その居場所を保健室に求めている傾向が見受けられるのである。

第3章 養護教諭の専門性

本章では、今日の学校における養護教諭の専門性について考察した。筆者が養護教諭としてのかかわり方のなかで重視していることには、傾聴、共感、エンパワーメント、客観性、環境づくりがある。今日、養護教諭は、学校の中における「緩和ケア」を担う存在として位置づけることができる。「緩和ケア」という言葉は、終末期医療のなかで用いられているが、学校における養護の活動を特徴づけるうえでも重要な概念となりうる。学校における緩和ケアは、身心の両面にわたるケアである。このような身心両面にわたるケアこそが、養護教諭の専門性として認められなくてはならない。

この研究をとおして筆者が見いだしたのは、学校のなかで子どもたちに現れているさまざまな問題は、多くの場合子どもたち自身の問題というだけでなく、教員の側の問題でもある、ということである。つまり、今日の学校社会に生きる教員たちがかかえているさまざまな困難が、子どもの問題となって現れている、とみなすことができる。本研究では、とくにこの点を明らかにすることを試みた。学校は、子どものケアだけでなく、教員たちのケアも重視していかななくてはならない。保健室を利用する教員たちに応えてゆくなかで、養護教諭としての筆者が見いだしたのは、養護教諭が教職員のメンタルヘルスの担い手としても、ケアを実践していく必要があるということである。